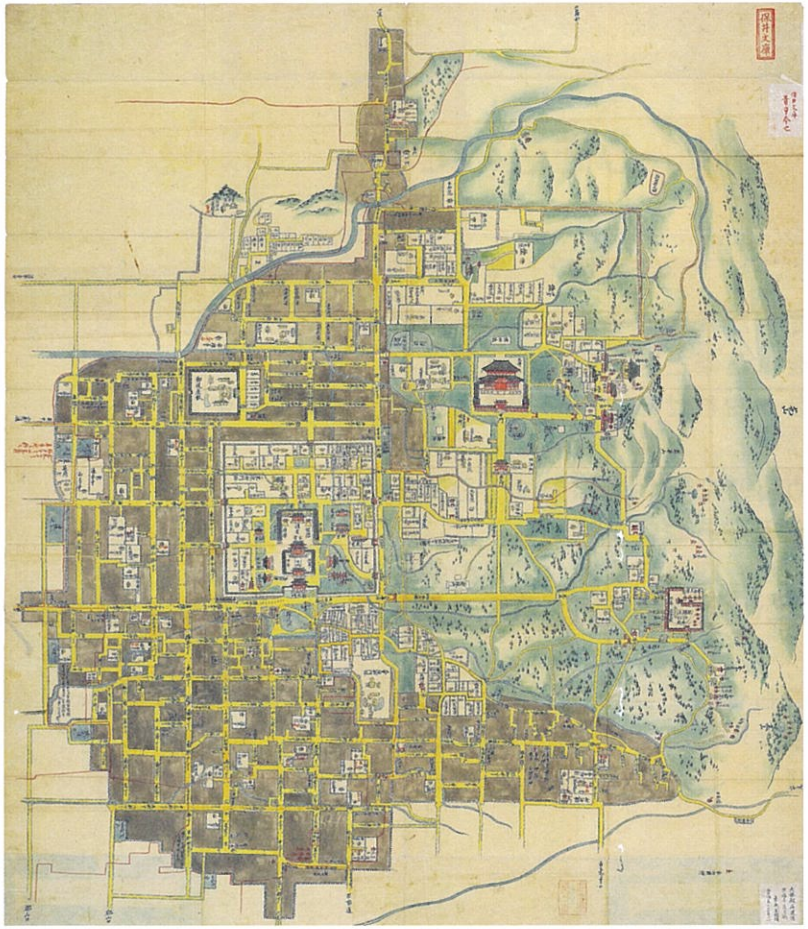
やまとの名品

奈良町絵図　十二折り本



▶【ならまちえず じゅうにおりぼん】

DATA

1舗
宝永・正徳期（1704-1716）頃
縦78cm　横90cm
（折りたたみ：縦20cm　横8cm）

❖江戸時代のにぎやかな奈良町を感じて

現在の旧奈良市街地にあたる奈良町は、平安時代以降、東大寺・興福寺などの門前町として発展しました。江戸時代になると、奈良晒（ならさらし）という高級麻織物の生産・販売を通じて商工業も盛んとなり、元禄期には、町人のみで六千軒、約三万五千人をも抱える都市に成長しました。

『奈良町絵図　十二折り本』を見ていくと、元禄五（一六九二）年から宝永六（一七〇九）年に再興された東大寺大仏・大仏殿および、享保二（一七一七）年に焼失する前の興福寺南大門・金堂などが描かれています。好調な経済に加えて、大仏再興により観光地としても注目されるようになった、奈良町が最もにぎやかな頃の風景がうかがえます。

本絵図には彩色がほどこされています。灰色に塗られた部分が市街地で、黄色が道路、池・水路は青色、山や園庭は緑色、そして寺社および役所は白色で、そこに建物のスケッチを加えています。町中の寺社や、小さな御堂もくわしく記しており、当時の景観を具体的に知ることができます。

また、奈良町らしい風情として、町の周囲に張りめぐらされた「鹿垣（ししがき）」（柵）が描かれています。春日の神の乗り物とされる鹿を傷つけず、農作物の被害を抑えるための防護柵として機能していました。

本絵図は、江戸時代の奈良町を語る上で欠かせない重要な資料といえるのではないでしょうか。

※「奈良町」とは……

江戸時代は、本絵図の灰色に塗られた部分が、奈良町の範囲とされる。現在は、北部の「きたまち」地区、猿沢池から南の「ならまち」地区および南端の京終（きょうばて）地区の総称として用いられる。江戸時代の町屋を多く残す「ならまち」地区が、観光地として脚光を浴びている。

（天理図書館　佐上圭太）

＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200　URL https://www.tcl.gr.jp/
◇平日（午前9時～午後5時半）　土・日・祝（午前9時～午後4時半）
○6月の休館日：6日・13日・20日・27日・30日
（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）
※最新の情報については公式HP、Twitterでご確認ください。